

入学式告辞

名古屋外国語大学を代表し、皆さんのご入学を心からお祝い申し上げます。また、今日、この会場にお越しくださいました保護者の皆様には心から御礼申し上げます。

皆さんの輝き溢れる表情を前にして、私自身、身が引き締まる思いです。

さて、今日から皆さんの新しい学び舎となる名古屋外国語大学は、創立二十五周年を迎えたばかりの若い大学です。人生に喩えるならば、まさに青春の真つ盛りと言つてよいでしょう。しかしながら、今はもう、中部地区でも随一と言われる強い勢いを持った大学に成長し、真の成熟が求められる段階に入りつつあります。今後は、これまでの勢いを継続しつつ、さらにその存在感を広く日本全国に向かつて発揮していきたいと、日々、努力を重ねているところです。特に、本学が導入している独自の海外留学システムは、国内にある八百近くにのぼる大学の中でも指折りの内容を誇るものであり、全国の大学から高い評価を得ています。私たちの大学が今、持つているこの勢いは、一言で言い表すなら、まさに「飛翔」、すなわち「飛びはばたくこと」ということになるでしょう。しかし、「飛翔」は、何も、皆さんがこれからの学生生活において海外に留学したり、あるいは卒業後、国際的なビジネスの場で活躍したりすることのみを意味しているわけではありません。皆さんの一人ひとりが、一個の自立した個性として、しっかりと想像力(イマジネーション)をはばたかせることも、やはり「飛翔」です。そして大学とは、まさに皆さんが、これから高く力強くはばたくための心と技術を学ぶ場なのです。

皆さんは、まだ、精神面において、幼い部分をたくさん残しておられます。心と知力と体力によつて世界に広くはばたいていくためには、鳥の進化について学んでおくことが大切です。皆さんは、鳥がなぜ、あれほどの長時間にわたつて空を飛ぶことができるのか、不思議に思つたことはありませんか。すでに生物の時間などで学んだかもしれない。鳥が飛ぶために必要な筋肉のほつんどが、胸の部分、つまり翼を動かす部分に集中しています。その重量は、体重の二十パーセント近くを占めるということです。人間は、おおよそ四十パーセントで、二倍多いのですが、胸筋のみで比較すると、実に人間の二十倍もあるのです。それでこそ飛翔が可能となるわけです。しかし筋量がたくさんあるからといってすぐに飛べるわけではありません。何よりも、大気と対話する方法が大切です。それが、鳥の声であり、呼吸法です。幼い赤ちゃんが、懸命になつて歩行を覚えるように、鳥もまた、声と呼吸法によつて飛行の術を命懸けで覚えます。

これを皆さんに喩えて言うなら、筋量とは、まさに人間が世界の中で生きていくための基本的な知識であり、教養であり、専門知識です。そこには、社会人として生きていく上での基本的なエチケットから、日本語や外国語を運用する基礎的な知識、文化や芸術を理解する力、さらには仕事を遂行していくための専門的技量などが含まれます。他方、鳥の声と呼吸法とは、まさに私たちがいうコミュニケーション能力です。どんなに立派な知識や教養を持つていても、それを発信する技術がなければ、最終的にはすべてが自己満足的なものに終わり、社会に出てしっかりと自立していく力となりません。ですから、皆さんも、鳥のよう

うに空気と対話する術をきちんと学んでほしいと思つたのです。

では、地球上に、何種類の鳥が棲息しているとお考えでしょうか。鳥は、北極から南極に至る地球上の幅広い範囲に棲息し、実に一万種あるとのこと。どんな鳥でも結構ですので、今、鳥のイメージを頭に描いてください。さて、どんな鳥が皆さんの頭に思い浮かびましたか。雄々しいタカでしょうか。敏捷なツバメでしょうか。それとも優しくおとなしいハトでしょうか。それらの鳥は、ことによると、自分がこれからなりたいと願う将来のイメージをそれぞれに暗示しているかもしれません。しかし、種類が何であれ、鳥という存在そのものの意味に変わりはなく、それぞれが、かけがいの生命を生きています。そして彼らは、例外なく、逞しい筋力と呼吸法を身につけ、集団の中にあつてなお自立して生きています。皆さんも、そうした鳥の成長に学ばなくてはなりません。まだ、若くて経験の浅い人たちのことを、しばしば「くちばしが黄色い」とか、「青二才」と言いますが、むしろ、皆さんは雛鳥ではありません。ただし、筋量、呼吸法ともに十分に身につけているとは言えないと思います。大学でのこれからの四年間の学びこそが、まさにその修練の場なのです。スマートフォンにばかりかまけてはいけません。どうか、友達との交流や集団生活の中に埋没し「鳥合の衆」となることなく、時にはしっかりと孤独と向かい合い、「能ある鷹は爪を隠す」と言われるくらいの知的な逞しさを身につけてほしいと念じています。

そしてもう一つが、想像力による「はばたき」です。皆さんは、おそらく「シンパシー(Sympathy)」という単語をご存じでしょう。「同情、思いやり、憐み」と訳される単語です。では、「エンパシー(Empathy)」という言葉はご存知でしょうか。これは、「共感、感情移入力」と訳される単語です。「シン(Sym)」とは、「同じ」とか、「共に」、を意味する接頭辞ですが、「エン(Em)」は、「中」に、「中で」、を意味する接頭辞です。二つの単語に共通する、「パシー(pathy)」は、パトス、ペーソス、つまり「感情」、「苦しみ」を表しています。では、「シン」と、「エン」では、どう違うのか、ということ。大切なのは、ただ、相手が可哀そうだ、とか、哀れだ、という消極的な思いにとどまることなく、積極的に他者の気持ちの中に入り込もうとする姿勢です。それこそが、エンパシーであり、想像力(イマジネーション)による「はばたき」です。もつと言うなら、人種や文化、国境を超えた人々への共感から、逆に自らをしっかりと省みる力と言つてもよいでしょう。日本社会や日本の政治が今、置かれている閉塞や孤立を脱するには、若い皆さんが、まさにこの「エンパシー」を深く身につけていかななくてはなりません。

さて、私たちのキャンパスは、日進の小高い丘の上に立っています。お隣では、私たちの姉妹校であるNUAS(名古屋学芸大学)の学生たちが学んでいます。今日から四年間、NUFS(名古屋外国語大学)のみならず、お隣のNUASの学生たちとも切磋琢磨し合いながら、充実した学生生活を送ってください。

そして最後に、皆さんの胸に刻んでほしいことが一つ。今日のこの日から、名古屋外国語大学は、皆さんにとつて人生の長い道連れとなるということ。皆さんのこれからの努力と将来における活躍によつて、私たちの大学NUFSそれ自体の輝きと未来もまた、日々、更新されるということ、私たち教職員一同も、そのことを胸に刻み、皆さんのよりよきキャンパスライフのために全力を尽くしていく所存です。

以上をもつて、学長の告辞といたします。

二〇一四年四月一日

名古屋外国語大学長

亀山 郁夫